コラム 10-1　視線の検出

私たちは，他者の視線に敏感で，どこを見ているかをかなり正確に推定できますが，最も鋭敏なのは，他者が自分を見ているかどうかという「人に見られているか否か」の判断です。

数メートル以上離れてこちらを向いている人が，自分を見ているのか，自分の方向を見ていても自分のすぐ後ろの別の人やものを見ている（自分を見ているのではない）のかという区別は，かなり正確にできます。このときの判断は，相手の目の白目と虹彩の位置関係から行われていますが，これは網膜上ではわずか 0.1 ミリ以下のズレで，視線角度にして 1～2°以下の違いに過ぎません。しかし，私たちは，かなりの精度でこの区別が可能であり，こうした視線の検出には，脳に特化したモジュールが存在すると考えられています。

他者の視線を検出することは，動物にとっては，自分が弱い側の場合には，捕食者が自分を狙っているかどうかを判断する重要な手がかりになり，自分が捕食者側の場合には，獲物となる動物が自分に気づいているかどうか＝捕食できるかどうかの判断の手がかりになるので，いずれにしても生存に大きく関わるため進化の過程で発達したと考えられています。

こうした中で，人間の場合，眼の特徴として白眼（角膜）と黒眼（虹彩）の違いがはっきりしており，そのコントラストから視線方向の検出が他の動物に比べて容易にできるようになっています。これは，人間のコミュニケーションにおいて視線の役割が重要になった（微妙な視線の変化を検知できるようになった）ことと関係があると考えられています。